

気象庁長官 長坂 昂一殿

2005年4月12日

cc：気象庁企画課長殿

社団法人日本気象学会
理事長 廣田 勇 公印

富士山測候所の活用に関する要望書

気象庁の富士山測候所は長い歴史の中で、種々の業務観測のみならず、現地で得られた貴重な気象データの活用を通して、わが国の気象学の発展に貢献されてまいりました。今般、山頂観測の無人化に伴い、これまでの観測施設の将来にわたる活用に関し、気象学およびその応用活動発展の見地から、管理運営を司るお立場にある貴台のご理解とご尽力をお願い申し上げる次第です。

現在、気象学会会員のなかで、特に大気化学分野での研究活動に励んでいる者は決して少なくありません。また、近年急速に発展してきたこの研究分野にとって、種々の大気組成や微粒子等のフィールドにおける直接観測の重要性は言を俟ちません。その意味で富士山頂の観測は自由対流圏中の孤立峰という世界的に見てもユニークな特長を持ち、この長所を生かした長期連続観測がもたらす成果は極めて重要であると考えられております。

さらに、富士山頂観測で期待される内容は、大気化学研究分野のみに留まらず、長期連続観測による地球環境監視の見地からも重要であり、このことはWMOの環境課長 L.A.Barrie 博士から富士山観測所継続に関する推薦書が寄せられていることから明らかです。気象の周辺分野としても、高所医学、天文学、生態学など多くのテーマに関し学際的な研究発展が望まれ、それらを通しての基礎科学全体への貢献が期待されます。

申し上げるまでもなく、科学およびその応用分野においては過去に積み上げられてきた貴重な経験体験を正しく受け継いでゆくことが将来の発展に不可欠です。その点、富士山観測に携わってこられた気象庁の諸先達が残して下さった多くの遺産を生かしてゆくのが我々の責務でもあると信ずる次第です。

以上の見地から、富士山測候所の今後の活用に関し、気象界の発展のために、気象庁のご理解とご尽力を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。